別紙様式２

令和５年度　大学活性化経費　事業成果報告書

事 業 区 分	地域への文化発信の拠点となる取り組み
申 請 組 織	現代マネジメント学部
申請組織長	**役職名**　学部長　**氏名**　植林　茂
統括責任者	**役職名**　教授　**氏名**　佐々木　圭吾
課　題　名	第 11 回ビジネスプラン・コンテスト

	役　割	氏　　名	所属・役職名	役割分担
事業組織	統括責任	佐々木　圭吾	現代マネ・教授	総括・運営・審査
		植林　茂	現代マネ・学部長	企画・運営
		東　珠実	現代マネ・教授	企画・運営
		椙山　泰生	現代マネ・教授	企画・運営・審査
		石井　圭介	現代マネ・准教授	企画・運営
		苗　馨允	現代マネ・准教授	企画・運営
		瀧澤　創	現代マネ・講師	企画・運営
		現代マネジメント学部事務室員		運営・連絡・渉外

１．事業開始の背景・経緯や目的等（200 字～300 字程度で記述）

本事業では、第 1 回から第 10 回のビジネスプラン・コンテストの成果に基づき、第 11 回ビジネスプラン・コンテストを開催した。

本コンテストは、これまで行なった 10 回のビジネスプラン・コンテストの実績を元に、第 11 回のコンテストを挙行することは、椙山女学園大学の地域社会へのアピールになるとともに、企業、行政などの本学への支援者を増やすことにつながると期待されたからである。

また、参加する高校生にとっては、高いビジネス意識をもって進学するというモティベーションにつながり、それを今後の学習への動機づけとし教育効果をもたらすことを期待するものであり、大学生には、起業の実践的体験につながることでマネジメントを実践する意識を醸成し、チームワークやリーダーシップ、組織管理の能力を育成することを目的とし、大学での学習と将来の社会活動に活かせるものと考えている。

さらには、本コンテストの実施を通じて、椙山女学園大学の社会的レピュテーションを高め、本学部及び本研究科への進学動機とその発展につながることが期待される。

２．事業方法（特色・独創性）等（300 字程度で記述）

第 11 回ビジネスプラン・コンテストについては、WEB サイトの公開、チラシを高校及び大学へ送付することにより告知し、プランの募集を行った。

１チーム 3 名以内の編成で、応募シートおよびエントリーシートに必要事項を入力後、専用 WEB サイトにアップロードすることで応募する。応募されたチームから第１次（書類）審査のうえ高校生の部 6 チーム、大学生の部 6 チームを選抜し、選抜者のみが本大会用の最終プランを作成し、プレゼンテーションを行う。なお、エントリー増加を目的としたプラン作成のポイントを解説する WEB 説明会（2023 年 7 月 22 日）をホームページに公開し、学内においては、公募説明会、２回のメンタリングを実施した。

本大会（2023 年 12 月 9 日）では、プランのプレゼンテーションを受け、本学教員及び外部識者を交えて厳正な審査を行った。本大会は、オンライン上でも見学希望者に配信した。

また、「原体験と日々の疑問、そして起業」をテーマにした起業講演会を株式会社 FINE の協力を得て同時に開催した。

３．事業の成果（600 字～800 字程度で記述）

Ⅰ　ビジネスプラン・コンテストの告知・実施

第 11 回ビジネスプラン・コンテストは株式会社エポスカード、株式会社ショクブン、名古屋市信用保証協会、名古屋税理士協同組合、東山遊園株式会社、株式会社三菱ＵＦＪ銀行、株式会社メルコホールディングスの協賛を得て、愛知県、愛知県教育委員会、名古屋市、名古屋市教育委員会、公益財団法人名古屋産業振興公社、株式会社日本政策金融公庫、Tongali の後援により本コンテストを開催した。また、東海・北陸地区の大学の経営・経済系学部、高等学校においては、現代マネジメント学部の指定校推薦対象校を中心に東海 4 県の高校にチラシを送付すること及び専用の WEB サイトを作成し本コンテストの告知を行うことにより広報を行った。

受賞チーム数は昨年と同規模としたほか、協賛組織・企業、外部専門家からも審査委員やアドバイザーを招き、実務家の視点を取り入れたビジネスプランの評価・審査を行った。

Ⅱ　ビジネスプラン・コンテストへの応募作品と学修・学習への動機付け

本コンテストへの応募の詳細は以下の通りである。

高校生の部 154 件（昨年 103 件、一昨年 44 件）

大学生の部 27 件（昨年 48 件、一昨年 23 件）

応募者は、富山県、静岡県からもあり、応募作品の内容も昨年度同様に、レベルの高いものが数多くあった。また、グループでプランの企画を行うことにより、チームワークやリーダーシップの実践を学び、起業への高い意識や企業家精神、マネジメントの疑似実践体験を持つことにより、学修・学習への動機付けとして本コンテストが活用され、アクティブラーニングの教育効果をもたらすことができた。また、参加者の増加を目指し、審査委員長がビジネスプラン企画立案のポイントを解説する説明および資料をホームページ上に公開することで、学生の参加意識を高め、企画立案のレベルアップという教育効果をもたらすことができた。

Ⅲ　起業に向けての講演会の開催

株式会社 FINE 代表取締役の加藤ゆかり氏の講演会を本大会時に同時開催した。生き方や自分のあり方を考えること、そして選択した関係領域の市場調査を徹底する、計画通りに物事が進まない時でも自分の軸をしっかり持ち、その上でチームの仲間と一緒に推進していく力を身につけることが大切との起業経験者の講話は、学生の意識を高めることにつながった。

４．キーワード（本事業のキーワードを１つ以上８つ以内で記載）

①ビジネスプラン	②社会課題の解決	③現代マネジメント学部	④現代マネジメント研究科
⑤　　起業家精神	⑥学修・学習への動機付け	⑦本学部への進学促進	⑧

５．事業の達成状況及び今後の課題（事業の達成状況を踏まえて、課題、反省点、及び今後の取組みを具体的に記載すること。）

○　応募の際の提出内容を簡素化し、テーマを協賛企業からも募集し提示したことが応募者の増加につながり、高校生の応募者は昨年比 1.5 倍に増加とコロナの影響を受ける水準以上に戻っている。しかしながら依然として、グループでの練り上げが不十分で、個人提案が目立った。大学においては、学部教育において教員及び外部専門家によるメンタリングを実施したことで、質の高い提案が行なわれたことは本事業の成果である。引き続き、高校生・大学生の質の高い応募を促進し、学生の関心をより高める施策を工夫することが必要である。

○　今回の本大会は従来行ってきた交流会による他校、他チームとの交流が可能となり一定の成果を挙げたこととなる。また、実施方法を再検討し良質な活動へ繋げることが課題である。

○　本コンテストに関しては、書類審査及び本大会を通じて学部そして大学内での他学部との連携、他大学・経済・経営以外の他学部の誘引の取り組み、愛知県や名古屋市の実施している施策との連携の工夫によって、今後より発展の余地がある。関係者の協力を期待したい。